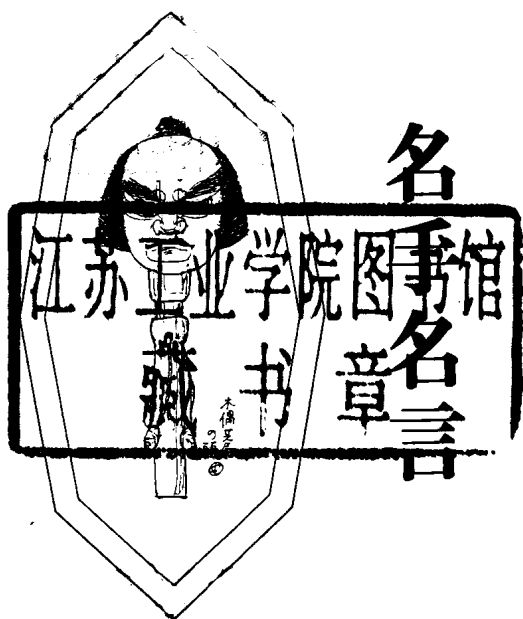


名手名言
山川静夫

中央法規

山川静夫



中央法規

◎著者略歴

やまかわ・しずお 1933年静岡市生まれ。1956年国学院大学文学部卒業、同年NHK入局。現在NHKチーフ・アナウンサー。主な著書に『綱大夫四季』（南窓社）、『歌右衛門の疎開』（文藝春秋）、『或るアナウンサーの一生—評伝和田信賢—』（文春文庫）、『人の情けの盃を』（淡交社）、『勘三郎の天気』（読売新聞社）などがある。

名手名言

定価——一二〇〇円（本体価格一二六五円）
発行——一九八九年一〇月二〇日

一九九〇年八月二〇日第四刷

著者——山川静夫

発行者——莊村多加志

発行所——中央法規出版株式会社

〒151 東京都渋谷区代々木二―一七―四

電話 東京〇三―三七九―三八六一（代）

装幀——代田獎

木偶人形絵——荒田秀也

印刷・製本——大日本印刷株式会社

乱丁本・落丁本はお取替えいたします。

ISBN 4―8058―0649―4

名手名言◎目次

稽古は花鳥風月に在り	6
ひっぱったりひっぱられたり	12
木は賢い	18
歌舞伎は黒蜜豆みたいなもんだ	24
絵にならん顔は生まれつきや	30
すべて、ひかえめにやることです	36
甘党には特級酒でも喜ばれないでしょ	42
とざしつつねむることあり	48
最も大切なのは平常心	54
どの子も育つ親しだい	60
本当に清元が好きなんだ	66
芸人は線香花火になるな	72
日本人が日本の音楽をやるのは当りまえ	78

私は私です……………	84
待つなんて料理人に対する侮辱です……………	90
拈華微笑……………	96
嫌いな人に逢ったことがない……………	102
行くも夢、止まるも夢……………	109
理屈でわかつちやいかんです……………	116
一日一歩……………	122
芝居は面白くなくつちや……………	128
そない喰ったらモノ忘れるわ……………	134
土の気持になれなきや駄目ね……………	140
こんな仕事で銭がとれるかつて……………	146
お代は見てのお帰りよ……………	152
孝夫は角行、仁左衛門は馬……………	158

俺の出し物なものになあ……………	164
充電してきますよ……………	170
意外に相手の話をよく聞いています……………	176
同じ機嫌の風車……………	182
気合です……………	188
朕モクは金！……………	194
蘇鉄は生えているか……………	200
ケ、セラ、セラ……………	206
愛情は残ってます……………	212
私って、こわい？……………	218
あとがき……………	224

名手名言

稽古は花鳥風月に在り

「芸てえものは、実に、努力のもんです」

もう十五年ばかり前になるが、私の司会する番組に落語家の桂文楽が出演して、こんなことを言ったのを、今も鮮明に覚えている。

昭和四十六年も残り少くなった十二月十二日の朝、桂文楽は七十九才の生涯を閉じた。

どちらかと言えば、あまり器用とはいえない文楽が、晩年は「芸の極致」とまであがめられ、その見事なツヤと江戸っ子の粹とを、嘶の中でいきいきとえがき出すことが出来たのも、一に努力、二に努力のたまものだったのだろう。

亡くなる少し前の八月三十一日、国立小劇場で催された落語名人会で「大仏餅」を演じていて突然絶句した。

その時、文楽は、

「申しわけありません。勉強し直して参ります」

と、潔くわびて高座をおりた。

何十回、何百回と演じた得意芸でも、健康をそこねたり、老齡化してくると、ド忘れという恐ろしい病いに見舞われる。文楽が、噺の筋道を見失い、高座で立往生した無念さは、いかばかりであつたろうか。その胸中、察するにあまりある。

落語という話芸は、ただひとり孤独でたたかうしかない。「心眼」「明鳥」「素人鰻」といった文楽の名演を落語ファンは忘れないが、そうした卓拔せる話芸も、文楽に言わせれば、

「噺家の味方は、扇子と手拭だけです。それで客にうけなかったら自分が悪いんです」と、実にきびしく自分を律していた心がまえの問題だったのである。

自分の努力不足を棚にあげて責任転嫁をはかろうとする人間には、肝に銘じてほしい名言である。

大阪の放送局に勤務していた頃、文楽、といっても桂文楽ではない「文楽人形浄るり」にのめりこんで、多くの舞台を見聞し、沢山の得がたい知己を持つことが出来た。

中でも、竹本綱大夫は、私にとってかけがえのない人である。当時、大阪南区二ツ井戸の住まいに足繁くお邪魔して、そのたびごとに面白い昔ばなしや有意義な芸談を聞かせてもらった。

綱大夫は幼少の頃から義太夫に対する才能が卓越していた。その天分に加えて、人一倍稽古が好きであった。

芸事は師匠と稽古によってきまるといってよい。まつちやまち松屋町の師匠と言われて恐れられた三味線の名人六世広助は、礼儀作法にやかましく、その上、気むずかしいので、弟子たちの足は、つい、にぶりがちだったが、綱大夫は、広助の気性をつぶさに観察し、率先して厳しい稽古をつけてもらった。

広助は朝が早い。綱大夫は夜の明けぬうちに広助の家へ着いて門前で待っている。やがて広助が起き出して、ポーン、ポーン、と柏手を打ち神棚に参拝する様子が知れると、

「おはようさんでございます」

と、入っていく。広助はびっくりして、

「えらい早いな」

と招き入れ、みっちり親切に稽古をつけてくれる。稽古というものは、どうしてもあとの人ほど軽くなってしまうもので、いやいや後から出掛けたものは、師匠の不興を買うのみか、稽古も適當になつてしまふ。早くさえいけばいい稽古がつけてもらえる、と読んで早起きを実行した綱大夫の作戦勝ちで、それも生来の稽古好きがなせるわざであつた。

男盛りの頃は、随分女ぐるいもしました、と禿頭をかきかき照れ話をする綱大夫だったが、そばに付き添っているたづ夫人は、こんな話をしてくれた。

「ほんまに、よう遊んでくれはりました。長い旅から帰ってくるなり、着物を着換えて又出ていことしますねん。どこへ行きますねん？ と聞くと、友達と約束がおますねん、今夜は失礼します、とこれですわ。これだけひどい遊びをする人でしたけど、外へ出る時は、どんな時でも床本ゆかほん（義太夫の文章が書いてある舞台で使う本）をふところへ入れていきまし

たわ。どんな時でも、淨るりの稽古だけはおろそかにしませんでした。女房として腹は立ちましたけど、この人、きつと偉ろなるやろなと、いつも思っていました」

居間には、綱大夫が敬愛する師匠の豊竹山城少掾が揮毫した色紙が飾られていた。

「口伝は師匠に在り、稽古は花鳥風月に在り」

これは、義太夫節の始祖、竹本義太夫が残した言葉だと言われている。表現はやわらかだが、大層つき放したつめたい教えである。

やる気があれば、いつ、どこでも稽古は出来る、日常の稽古をしない奴にいくら教えても無駄だ、先輩に教えてもらうことばかり考えるのは甘い、芸は孤独なのだ、自分でやるっきゃない、ときびしくいましめているように私には思える。

「口伝」をかみしめれば、目の前に師匠がいなくても、基本的な教えは学ぶ者の胸の中によみがえるはずだ。しかし、大切なのは「口伝」と共に「稽古」をおこたらないということである。自分の周囲、つまり「花鳥風月」の中に、えも言えぬ教えがひそんでいることを忘れてはいけない。見るもの、聞くもの、ふれるもの、それらすべてを貪欲に吸収し、

人間としての幅を厚くするように努力すれば、きっといつの日か、いい芸を生み出すことが出来るのだろう。

芸には天分がはつきりかわりあう。しかし、人間の生きがいや人生のよろこびは、天分とは関係ない。天から与えられたものを大切にし、自分に不足したものをみたしていく努力こそ、一番大切なのである。身にすぎたものは師匠であり、不足せるものは稽古なのだ、^がと思い知らされる名言である。

竹本義太夫の教えを大切に、師匠を大切に、数々の名演を残した竹本綱太夫も、すでにこの世を去ったが、この名言だけは生き続けて私を鞭うつ。

(61年9月)

ひっぱったり ひっぱられたり

いかにも下町らしい家並がつづく。

「稲荷町の師匠」といわれた落語の林家正蔵さんの長屋があつたあたり、東京の東上野かいわいである。

いつだったか、正蔵さんそこへ取材に行つて、御自慢の牛井をごちそうになつた。

「これは、そのオリ、特別にいい牛のモツをうんとこさ煮込んだんだよね。ちよいと他所様じゃア出せない味だと思ひますよー」

例のふるえるような声で正蔵さんが説明し、弟子やみんなに食べさせ、近所にもふるまつていた。

あの牛井は本当にうまかつたな、と思わず舌なめずりをして、その時の正蔵さんの飾ら

ない物腰や下町のあったかい人情をかみしめるように、ゆっくりと歩く。

目指すは橋本禎造^{はしもとていぞう}という表札。橋本さんは歌川派^{うたがわ}の流れをくむ人で、江戸風絵師の最後の人と言われている。

門口から風の材料とおぼしきものがゴタゴタと積みあげられている中をかきわけるようにして橋本さんの奥さんが、いつもテレビで拝見していますんですよ、やつぱりそっくりですね、と私を迎えてくれた。

仕事場は二階である。天井からは風の骨に使う竹ひごや、なま乾きの絵がぶらさがっていて、腰をかめなければぶっそうだ。そのわずかな空間に、堂々たる髭をたくわえた橋本さんが、立膝で職人らしくすわっていた。

八十三才。気さくな人柄である。江戸仕込みの風づくりを三代にわたって守りつづけている橋本さんは、

「そろそろはじめてよござんすか」

と、奴風を画きはじめた。

「風絵なんてえものは、たいしたもんじやないんだ。ごく大ざっぱに画けばいいんですよ。それが、この頃は馬鹿丁寧に画けばいい風が出来ると思っているから困る。風絵の値打ちは空へあがった時できまるんです」

風絵師はあまり筆は使わない。ほとんどの仕事はハケである。このハケは一度に広い面積を塗ることが出来、仕事が早い。細い線をひく時はハケの角をたくみに使う。さすが橋本さんは、その技術を苦もなくこなす。

奴の絵でもダルマでも、真正面の顔はむずかしいという。木炭の下図の上に太い墨の線が入ると、長唄「供奴」のへきりりとしやんと、しやんきりり……という感じの奴さんの輪郭が浮んできた。

風は、股ぐりで知られる漢の時代の中国人、韓信が考え出したと言われるがあてにならない。歌舞伎の「曾我の対面」で並び大名のわたりゼリフに、「風のうなりのぶうぶう」というのがあるから、江戸時代からうなりつきの風が楽しまれていたのだろう。ちなみに、東京はタコだが、関西はイカノボリ、また地方によってはハタ、といろいろ呼び名がちが